

20歳まで
彼女なし童貞。

対人恐怖症
女性恐怖症に苦しめられた

ニャンチカの
プロフィールレポート

はじめまして、ニャンチカといいます。

この度は僕の自己紹介レポートに、
興味をもって頂きありがとうございます。

このレポートでは僕が大学生にしてなぜナンパを始め、
現在に至るのかについて話をしていこうと思います。

僕がナンパ師になれた理由を事細かに書いているので、
これからナンパをする人にとっては、
非常に勉強になる内容になっています。

僕はいま大学に通いながらもナンパ師として

- ・ナンパでの経験人数が**10人突破**
- ・月**2人**の女性ゲットを**3ヶ月連続達成**
- ・ナンパ開始**1ヶ月**で**1人**ゲット
- ・ペアーズ開始**1ヶ月**で**100**いいね

などの成果を出すことができました。

と言っても大学生でナンパ師とか怪しすぎますよね。

僕も最初は信じられませんでした。

しかし今ではこのような一見非常識な世界が、
当たり前になり日々充実した生活を送っています。

僕はもともと自分で、
ナンパをやるなんてことは
全く考えたことがありませんでした。

僕の中でナンパするということは、
生まれつきトークが上手だったり、

イケメンでリア充の選ばれし人間にしか、
できないものだと思っていました。

それに僕は20歳まで童貞でしたし、
対人恐怖症、女性恐怖症に悩まされてきたのです。

ですが、今なら

**ナンパで女の子とエ○チしたり彼女にすることなど
誰でもしっかり取り組めば可能である**

と思っています。

そんな僕でもある出会いをきっかけに
価値観が粉々にぶっ壊されナンパを始めることになります。

果たして何が僕の人生を変えたのか？

それではここから僕の人生をさかのぼって
幼少期のころから話していこうと思います。

**今回は嘘偽りなく自分の全てを晒け出すことを決意
し、このレポートに「今までの自分」を
書くことにしました。**

このエピソードを読んでもくれた方が、

「今までの自分なんて関係ないし、今から本気で取り組み、ナンパで可愛い女の子とエ○チすることだってできるんだ！」

と希望を持てるような内容にしました。

最後までお付き合いいただければ幸いです。

目次

第1章

「常に他人に怯えていた幼少期時代の僕」

第2章

「女性恐怖症に苦しみ1日3回オ○ニーしていた僕」

第3章

「ストーカー呼ばわりされた地獄の高校生活」

第4章

「対人恐怖症を発症し友達0人のまま終了した新歓」

第5章

「友達に彼女ができて発狂した大学1年生の僕」

第6章

「就活中だけど飲み会でナンパに目覚めた大学4年生の僕」

第7章

「池袋で地蔵する日々と運命の出会い」

最終章

「対人恐怖症の僕がナンパ師に弟子入りしたら人生変わった」

～第1章～

常に他人に怯えていた
幼少期時代の僕

福島県の田舎の病院で僕は生まれた。

両親は僕には厳しく、弟には甘かった。

明らかな不平等を感じていた。

両親が悪かったわけではない。

弟には甘くせざるを得ない理由があったのだ。

弟は生まれつき体が弱かったのだ。

小学校に入るまでは、毎年1回は入院してた。

すると、家に帰ると親がいない。

休日なのに、遊んでくれない。

寝るときはいつも母親と弟と一緒に。

僕は別部屋。

「なんで弟ばかり」

いつも文句を言っていたが、何も変わらなかった。

寂しかった。

ただただ寂しかった。

僕は寂しがり屋になった。

もちろん、弟のことで精一杯だったから

僕にかまう余裕がなかったのは、仕方がないことだった。

だが、当時の僕には寂しすぎた。

この寂しいという感覚が染みついてしまったせいか、

23歳になった今でも寂しがり屋だ。

今でもたまに彼女がいなくて寂しくて泣き出したり、

友達と朝から晩までラインしたり、ということがある。

とにかく、寂しがり屋。誰かと一緒にいたい。

そう思うのだ。

親には厳しく育てられた。

特に父親は厳しく、殴られることが当たり前だった。

父親の言うことは絶対。

父の言うことに疑問を持ち、
「なんで？」と聞き返そうものなら、
張り手が飛んでくる。

父親と遊んでいて
ボールで顔面を殴られ、
鼻血を出したり、
お尻をペンペンされたことがあった。

だけど当時の僕は「父親とはそういうものだ」と、
思い込んでいたから何一つ疑うことはなかった。

恐怖でしかなかった。

母親は優しくかったので、だいぶ助けられた。

父に殴られた時は、
すぐにレスキューしてくれるので
神様だと思っていた。

父と母の仲は悪かった。

いつも喧嘩していたし、口論しているのを必ず見た。

一度も仲良く話をしているのを見たことがなかった。

夏休みや長期休暇になると、
母方の祖母の実家で過ごしていた。

家にいると、喧嘩が絶えないからだ。

夏休みは家族と入りびたり。

別につまらなかったわけではない。

もちろん、楽しいことも多かった。

山や温泉に行ったり、
海に連れて行ってくれた。

家にいると、母と父が喧嘩するから、
夏休みや冬休みは、避難するために、
母方の祖母の家に来たということは僕でも気づいていた。

けれども、母の実家も全く平和ではなかったのだ。

祖母と祖父の仲が悪く、
毎日家で喧嘩をしていたのだ。

祖母が祖父を罵倒していた。

小さい頃はなんで喧嘩しているのか、
全く分からなかった。

だけど、祖父は全て無視しているように見えた。
祖父は全く相手にしていないようだった。

僕ら子供の前では喧嘩を見せるべきではないと、
思っていたらしく僕たちがいないところでは、
どうやら普通に喧嘩をしていたようだ。

こんな風に、母と父はいつも喧嘩をするし
祖母も祖父と毎日喧嘩しているから
夫婦の仲は悪いのが普通だと思っていた。

「家族とはこういうものだ」とその時から完全に思い込むようになった。

そのころから、僕は「家族の誰かしら」に対して
びくびくするようになった。

家にいると誰かしら喧嘩をしている。
イライラしているから、気を付けないと怒らせることになる。

そうやって僕は常に他人に怯える人間になった。

～第2章～

女性恐怖症に苦しみ
1日3回オ○ニーを
していた中学時代

僕は中学生になった。

中学受験を失敗したこともあり、
地元の公立中学校に進学した。

僕が中学校でいつも思っていたこと。

それは、、、

「絶対に良い成績をとっていい高校に行く」

ということだ。

実際僕は狂ったように勉強した。

集団塾にも通って、
家庭教師も雇って、
休みの日も朝から晩まで勉強していた。

クソがつくほどのガリ勉野郎だった。

長時間勉強していたこともあり、
クラスでは1年生の時点で1位になった。

そんな感じだったから、
僕はそれなりに中学校生活に満足していた。

ある一点を除いては。

女の子が怖いという悩み以外は。

僕は女の子が怖くて仕方がなかった。

全く目を見て話せない。

女の子と会話したら、

キョドリ始める。

ぎこちなくなるのだ。

そのせいもあってか、
クラスの女子からは次第に話されなくなった。

「あの人なんかおかしくない？」
と女子からは変人扱いされていたのだ。

小学校の頃からも女子は苦手だった。

理由はわからないが、
小学5年生の頃から急激に、
女子のことを意識するようになった。

それより前は女子と普通に話せていたのにである。

もちろん、女の子と関わりたくなかったわけではない。
むしろその逆である。

女の子と関わりたくて仕方がなかった。

女の子と話したかったし、
女の子と仲良くなりたかった。

手を繋いで登校するカップルを見ると、
無性に羨ましくなった。

それに性欲にも中学1年生の頃から、
火がついた。

1日3回オ○ニーをするほど、
僕の性欲は溢れんばかりになっていた。

だけど、僕の性欲をぶつける先は何もない。

僕の精子を受け止めるのは
家に置いてある鼻セレブのティッシュだったのだ。

毎日3回もオ○ニーを繰り返していたので、
僕のち○こは大変なことになった。

まず亀○が擦れすぎて真っ赤になる。

そして、握りが強かったせいか、
竿の部分に切り傷が入る。

そして3回もオ○ニーしているせいか、
全く何も出てこないことがザラだった。

「スポイドの一滴の方が多いのでは？」と、
思うくらいの量だった。

こんな調子で僕はオ○ニーの世界に逃げ込んだのだ。

実際の女の子に絡むことはなかった。

結局中学校では女の子と関わることなく、勉強だけに身を捧げて終了。

もちろん好きな人はいたけれど、怖くて話しかけられなかった。

結局一言も話さないまま卒業した。

僕は受験までひたすらオ○ニーと勉強に打ち込んでいた。

その甲斐もあってか、県で4番目くらいの公立高校に入学できた。偏差値は65くらいの進学校である。

そして中学の卒業式では、早くも高校のことを考えていた。

「中学はダメだったけど高校は楽しくなるんじゃないか？」

期待しか抱いていなかった。

僕はそう思っていた。ダメなパターンの典型である。

中学生「高校生になったらモテるってゆうよな？」

高校生「大学に入ったらみんな彼女できるって聞いたけど？」

大学生「社会人になったらお金手に入るからモテるんじゃない？」

社会人始め「男は30歳からって言うしな...」

30歳「周りもう結婚し始めてるよ...」

モテない奴は一生モテない。

モテる奴はどんな状況でモテる。

僕は「～になったらモテる」と妄想するばかりで、
今の自分を全く変えようとしなかった。

そうして高校生では、
まさに地獄のような日々が続くことも知らずに...

～第3章～

ストーカー
呼ばわりされた
地獄の高校生活

僕の女性恐怖症は高校生になっても、
治ることはなかった。

相変わらず女の子が怖かったので、
入学して半年間は全く会話なし。

入学当初はみんな友達が欲しいから、
仲良くなりやすい。

それは男子も女子も一緒である。

なのに半年間女子と話せなかった僕。
女性恐怖症と言わずなんと言おうか。

女子と話すときは中学同様、挙動不審になっていたので、
「キョドリン」というあだ名がついたほどだ。

そんな僕にある出来事が起こる。

クラスの女の子に、
一目惚れをしてしたのだ。

「やべえ。くそかわいい」

一目惚れの理由も、

かわいいから

それだけでした。

高校のミスにも、
選ばれたくらいですしね。

芸能人の石原さとみ似でしたね。
めちゃくちゃ可愛かったです。

しかも何がすごかって、
彼女は優しい。

どんな男の子とも、
気さくに話すし、
常に笑顔だったので女友達も多かった。

なので女性恐怖症の僕とも、
笑顔で会話してくれたのだ。

僕がどんなに「あー。」とか詰まっても、
顔をしかめることはなかったし

（正確に言えば、他の人よりはという意味）
優しく話しかけてくれるように思えた。

神。
マジで神だった。

女性恐怖症で挙動不審な僕に、
優しく話しかけてくれる神。

「めっちゃ優しい…。こんな俺とも話してくれる」

気づいたら彼女に、
本気で夢中になっていた。

「彼女は他の女の子と違って俺とも話してくれる」

そう思った僕は彼女に、
その後も話しかけに行くようになったのだ。

休み時間、
朝の登下校、

などなど怒涛のように、
話しかけに行く僕。

そして学校が終わったら週に2、3回は、
メールをこちらから一方的に送った。

「今日も学校お疲れ様」
「今何してるの？」

という感じで僕はメールを送信。

その時に僕が考えていたことは、
「もっと彼女と話したい」

ただそれだけだった。

そんな時、僕を驚愕させたある出来事が起こる。

ある日のこと、

彼女の中の良い友人が、
珍しく僕に話しかけにきたのだ。

「あなたにずっとつきまとわられて
彼女が嫌がっている」

「彼女につきまとうのはもうやめて欲しい」

「えっ...？」

僕は全く事態が飲み込めなかった。

一体どういうこと??

あの彼女が??

あんなに楽しそうに話してたじゃん????

??????????

僕の理解は、
全く追いつかなかった。

と同時に寒気がするほどの恐怖と、
猛烈な吐き気が襲ってきたのだ。

**「今まで彼女が楽しそうに
話してたのも全部嘘？」**

「心の中ではうざいと思ってたってこと？」

「これも友達に相談してたの??」

うおおおおおおおお

僕の頭は完全にパニック状態。

**結局その彼女の友人からはストーカー呼ばわりされ
学校中の噂になりバカにされ、ドン引きされた。**

という末路を辿ることになった。

それに僕を最も驚かせたのは、
彼女に付き合っている相手がいたのだ。

しかもクラスメート。

僕があまりにも話しかけに行くことに、
嫌悪した彼は、

僕を「ストーカー」と影で噂したのだ。

確かに僕がやっていることは、
ストーカー同然だったし、
それは弁解の余地もない。

だけど、それらの出来事は僕の女性恐怖症を、

ますます加速させたのだ。

「あーお前があの可愛い子に振られた奴なのね」

と知らない男から言われることも多々あった。

恥ずかしすぎて顔から火ではなく、
血が出そうな勢いだった。

死にたくなかった。

「そうだよな...？こんな俺なんかと仲良くしたくねえよなあ？」

「こんなキモい俺と話したくなんかねえよなあ？」

そうやって僕はだんだんと卑屈になっていった。
それと同時に女の子と話すことは一切なくなった。

話しかけに行かなければ、
好きにならなければ、

傷つくことはない。

僕はそうやって自分の感情を、
押し殺して行った。

その事件が尾を引いて、
それから女の子と関わることはなかった。

中学時代と同じように、
授業を受けて、
放課後は部活動をして、
その後塾に行つて、

毎日オ○ニーして、
鼻セレブのティッシュに射精する、

という毎日を繰り返した。

そんな毎日を送っていたら、
僕も高校3年生なった。

いよいよ受験だ。

「大学かあ～志望校とかないよなあ」と思いつつ、
ネットで大学を探していたら、

「頭のいい大学はモテる。」

「特に東大京大早慶はモテる。」

と2chに書いてあるのを見つける。

「ほほ～マジで？」と興奮しながら見る僕。

**「東大京大早慶のサークルには
いろんな大学の女の子が入ってくる」**

「偏差値が低い大学とか女子大の子は アホみたいによってくる」

と書き込みが続く2ch。

「もうこれは行くしかない」

実に単細胞である。

お前には考える頭がないのか。
おち○ちんの言いなりなのかと問いたい。

そう思った僕は、
志望校を早慶に絞った。

東大京大は学校でも年に一人出るかその程度。
だったら毎年20人以上出ている早慶の方が確実にいい。
僕はそう考えたのだ。

だが自分の不器用さもあり、
現役時はことごとく失敗。

法○大学にかすった程度。

ですが「早慶に行ってモテまくりたい」と、
思っていたので、法○を蹴って浪人することになる。

浪人した後は「早慶に行ったらモテる」というモチベだけで、勉強しまくったのだ。

大好きなオ○ニーをやめて、全部勉強につき込んだ。

毎日3回していたオ○ニーをやめて、2ヶ月オナ禁したこともあった。

その2ヶ月は自分の性欲を、全て勉強に昇華したせいか、

3日で英文を100個覚えたり、日本史の偏差値を80にあげたりと、驚異的な学習能力を発揮した。

逆に自分の性欲の可能性にもワクワクした。

「合格すればこの性欲も解放できる」とか、わけわからないことを考えていた。

そんな猿みたいな僕だったが、必死に勉強したおかげで早慶に無事合格した。

「早慶に行ったらモテるらしい」

よくこの一心だけで頑張れたなと今では思う。

そうして僕は大学に入学することになったのだ。

だがバラ色の大学生活とは、
程遠い灰色の生活を味わうことになると、
その時は気づかなかった。

～第4章～

対人恐怖症を発症して
友達が0人のまま
終わった入学式

結論から言うと世間の人々がイメージしている、
華やかなキャンパスライフは僕にはなかった。

彼女や友達と楽しく過ごす毎日もなかった。

なぜそうなってしまったのか？？

その原因は浪人にあった。

僕は浪人中に家と塾の往復を1年間繰り返していた。

予備校では友達がいなかったので、
誰とも話さない日がザラにあった。

そうなる何が起こるのか？

そう。

僕は会話の仕方を完全に忘れてしまったのだ。

「あれどうやって今まで話してたっけ俺...」

さらに今まで拗らせていた女性恐怖症も加速し、
人とともに会話することができない対人恐怖症に、
なってしまったのである。

男にすら話しかけに行くのが怖い。
怖くて行けない。

そんな調子だったから、
入学オリエンテーションでも、
入学式でも**友達が0人**というひどい状態だった。

そんなコミユカ皆無の僕が楽しい大学生活を、
送れたのか？

そんなわけがない。

ぼっち飯は当たり前で、
いつも授業は一人で受けていた。

友人もいないし彼女もいないので、
学校が終わったらすぐ家に直帰。

女の子との関わりもないので、
相変わらず家でエクスビデオを見ながら、
オ〇ニー。

浪人してやっと念願の大学生になれたのに、
大学生活が一ミリも楽しくなかった。

そして周りは新歓でコンパ祭り。
その勢いで付き合うカップルも大量発生するし、
持ち帰ったり、持ち帰られたりする同期もいた。

僕も女の子と仲良くしたかった。

女の子と話したかったし、
彼女だって欲しかった。

大学生なら誰もが夢見るワンチャンだって、
したかった。

でも僕にはそれができなかった。

一歩踏み出す勇気がなかったのだ。

僕は常に怯えていた。

「俺には一生彼女なんてできないんじゃない...」

「俺は一生童貞のまま死ぬのか？」

怖くてたまらなかった。

毎日夜になるとそのことが頭を駆け巡って、
夜中の3時にならないと寝ることができなかった。

俺には未来があるのか??

行動しようにも、
対人恐怖症、女性恐怖症のこともあって、
勇気を出すことができなかった。

そんな夜中の3時まで錬れない生活が、
4月から7月まで続いた。

悩んでいるだけだったから、
当然何も変わらなかった。

いつもと同じような毎日を繰り返すだけだった。

一限に出るために眠い目をこすりながら学校に行き、
授業が終わったらバイトに行く。

そして夜はエクスビデオを見ながらオ○ニーする。

こんな廃人みたいな生活から抜け出すことはできなかったのだ。

～第5章～

友達に彼女ができて
発狂した
大学1年生の僕

そんな僕に追い打ちをかける出来事が起こる。

高校の頃の友人に彼女ができたのだ。

彼は僕と同じ「彼女いない歴＝年齢」の童貞だった。

そんな彼に彼女ができただと??

信じられなかった。

一緒にご飯を食っている時に、

そう彼は話してくれた。

友人「そういえば俺彼女できてさあ～」

僕「!?!?!?!?!?!」

友人「そうなんだよ～彼女できちゃってさ。これ写真」

僕「マジで??? (くっ...可愛い...)」

友人「お前はなんかないの？」

僕「いやあ...ないねえ... (ねえよボケ) 」

僕は彼に親近感を覚えていた。
親近感というよりは、
彼を見ていて安心していただけだ。

「彼女いない奴なんて沢山いるから俺も平気」

僕は彼のことを思い出して安心していただけだ。
だけど、そんな彼にもついに彼女ができたのだ。

取り残された。

そう思った。

俺はこのままでいいのか???

さすがに僕は焦り始めた。

「あいつにも彼女できたのにお前は悔しくないのか??」

「本当に俺は死ぬのかもしれない...
このままじゃ童貞のまま死んでしまうぞ！」

やれ

行動しろ

とにかくもう行動するしかない

「あいつにも彼女ができたんだから、
お前にだってできないわけないだろ」

僕は自分にそう言い聞かせた。

ここから壮絶な僕の闘争が始まる。

ヒトラーもびっくりの”我が闘争”だ。

ただやる気はいいものの、
女の子との話し方は全くわからなかった。

これではいけない。
まずまともに目を見て話せない。

僕は必死に考えた。

まず女の子と緊張しないで、
目を見て話すにはどうするか？

ネットで調べたところ、
キャバクラが良いとあった。

ただキャバクラは値段的に、
学生には厳しいものがある。

そう判断した僕は、
ライブチャットで女の子と話しまくる作戦を決行した。

とにかく喋りまくった。

暇さえあればライブチャットの、
お姉さんと話していた。

そんな調子でライブチャットを、
3ヶ月間続けた。

そしてライブチャットを始めた頃、
ネットでモテるための方法を調べまくっていた時、
恋愛商材の存在を知った。

恋愛商材とはモテるための方法をPDFファイルでまとめた、
電子書籍のようなものである。

最初その存在を知った時、
「超絶胡散臭えwwww」と思っていた。

だけど僕には方法がなかった。

「ここで彼女ができなかったら死ぬ」と考えていたので、

使えるものはなんでも使おうという、
わらにもすぎる思いがあった。

そして恋愛商材をいくつか購入して内容を読み込む。
それをライブチャットのお姉さんに試してみる。

その会話をレコーダーで録音して、
「何が悪かったのか？」を反省する。

とにかく試行錯誤する日が続いた。

さすがに3ヶ月も続けていたので、
女性には慣れていった。

毎日自分の声を添削しているだけあって、
会話もマシになっていった。

後はひたすら出会いを増やして、
場数を踏もうと考えた僕。

その後は狂ったように、
出会いを求め続けた。

出会い厨と化していたの間違いない。

サークルの女の子に手当たり次第に話しかけて、
デートに誘いまくって、サークルから追放されたり。

授業で隣にいる女の子に片っ端から話しかけたり。

大学生なのに、社会人のふりをして、
街コンに行ったり、婚活パーティーに行ったり。

バイト先の40歳以上の主婦をご飯に誘ったり。

弟の友人 (jk) をホテルに誘ったりと。

やり方がえげつなかった。

「もう誰でもいいから」という僕の態度が、
見え見えだったのでそれで逃げられた女の子も沢山いた。

手当たり次第行動しまくった。

僕の頭には、
「ここで諦めたらお前は一生童貞だ」、
という恐怖しかなかったのだ。

そんな調子で行動を繰り返して半年。

なんとか彼女を作ることに成功した。

振られた人数5人

デートに誘った人数10人以上

という幾多もの犠牲を払い、
大学2年生の初めで「彼女いない歴＝年齢」に、
終止符を打つ。

人生初めての彼女ということで、
何もかもが新鮮で楽しかった。

人生初めての手繋ぎ。
人生初めてのキス。
人生初めてのエ〇チ。

全てが新しくて、
毎日興奮しっぱなしで、
夜はなかなか寝つけなかった。

何より圧倒的な自信を得ることができた。

元対人恐怖症、そして女性恐怖症の自分でも、
彼女を作ることだってできるんだ！

そう思うと自分の中で何かが、
芽生えたような気がした。

「俺にはできないことなんてない！」という、
変な奴になっていたことを覚えている。

そんな調子で彼女とは楽しい時間を、
過ごすことになったのだが、
その付き合いも長くは続かなかった。

やはり最初に付き合った彼女ということもあって、
僕がどう振る舞えばいいのか、
どんな態度ですっと接していけばいいのか、

それがわからなかったのだ。

結局彼女とは半年ほどで、
別れることに。

ただ僕はそれほどショックではなかった、
むしろ満足していたのだ。

「こんな俺でも半年も付き合えたんだ。」

どうせすぐに彼女ができるだろう

実際この頃は昔のように女性恐怖症を発症することもなく、
女の子とも普通に話せていたから、
女友達も増えていった。

自分のコミュ力が上がっているのも確かだったのだ。

ただ、、、

その考えが地獄の始まりだったのだ。

結局その考えのせいで、
僕は散々な目にあうことになる。

～第6章～

就活中だけど
飲み会のせいで
ナンパに目覚めた
大学4年生の僕

彼女と別れてから、
1ヶ月、3ヶ月、半年、1年、2年が経った。

僕はある異変に気付いた。

それは

彼女ができない

ということだった。

「なんでだ...なんで彼女できねえんだ」

それもそのはず、

出会いが皆無だったのだ。

大学入学当初は、
新歓期のコンパや、
サークルが活発なこともあって、
女の子との関わりはそれなりにあった。

でも、大学3年生、4年生となっていくと、
学校の授業もなくなり、
サークルもぼちぼち引退。

残るはリクラブだけという状況。

リクラブとはリクルートラブの略称で、
就活中に会って付き合ったり、
ワンチャンすることである。

リクラブでも女の子にアプローチしたが、
大失敗をする。

気付いたら自分の周りには女の子がいない。

そんな状況だったのだ。

僕は昔と同じ感情を抱いていた。

もうこのまま彼女ができないんじゃないか??

俺はもう誰ともエ○チすることなく、
大学生活を終えるのか?

この時ばかりは超絶に焦った。

そもそも出会いがないので、
彼女を作りようがなかった。

「このままじゃまずい...とにかく出会いを増やさないと...」

そう思った僕だったが、
手段は全く思いつかなかった。

「昔入っていたサークルは女絡みで追放された...」

「周りの男友達の紹介も期待できそうにない...」

「合コンをするにしてもイケイケの男友達はいない...」

「4年になって今さらサークルに入るのも厳しい...」

「婚活パーティーや街コンは値段が高い割に成功が難しい...」

「バイトは家庭教師だから出会いはない...女子中学生とか奥さんにも手を出すのはマジでやばいし...」

「うおおおおおお。どうすればいいんだ！」

結局僕は何もできず、
今までと同じような毎日を過ごしていた。

「もしかしたら何か起こるかもしれない」
淡い期待を抱きながら。

もちろん、何も起こらなかった。

ナンパを知るその日まで...

そんなある日
久しぶりに会う大学の友人と、
飲み会をすることになった。

そこで驚くべきことを知ることになる。

それは何人かの友人が、
こぞってナンパをしていたのだ。

「ナンパしてこの前エ○チできたぜ」と、
自慢気に話す彼。

「へー凄いねえ～」と聞いていたのだが、

「ナンパで捕まる女なんてロクでもない女しかいない」

「俺にはマシンガントークもできないし、ナンパなんて無理」と

僕は完全に拒否反応。

だが、

「ナンパで持ち帰るなんてすげえなあ」と、
心のどこかでは羨ましがっている自分もいた。

そしてそいつがあまりにも、
自分のナンパ武勇伝を偉そうに話してくるので、
ムカついたので。

うるせええええ。ナンパなんて俺ぐらいでもできるわ！！

そしてその日の帰り道で、
僕に名案が閃いた。

あいつでも持ち帰れるんだから、
俺だってナンパしたら持ち帰ったり、
彼女ができるようになるんじゃないか？？？？

そうじゃん。

確かナンパは出会いを無限に作れるって、
誰か言ってたよな。

もうナンパするしかねえ。

僕はそうやってナンパに淡い期待を抱いて、
街に繰り出しに行くようになった。

けどここからが大変だったのだ

～第7章～

池袋で地蔵する日々と
運命の出会い

ナンパしたら誰もが陥ると言われる

地蔵

僕はお地蔵さんのように、
声がかけれなくなったのだ。

声がかけれない。

女の子を目の前にして、
いざ声をかけようとする、

心臓がバクバクしてしまう。

「俺はとんでもないことをしてるんじゃないか？」
という罪悪感。

そして、
「なんて言ったらいいんだろう？」
という疑問。

Googleで

「ナンパ 声かけ」とググるも、

わからずじまい。

そんな調子だったから、
僕は街に出ても、
6時間立ちっぱなしということが、
ザラにあった。

全く声をかけられない！

やべえよ...これじゃラチがあかない...

「やっぱり俺なんかにナンパなんて無理なんじゃ」

でもここでナンパをやめたら、
僕には出会いの手段が何も残されていない。

合コンだって、
紹介だって、
サークルの会合だって、
何もないのだ。

そう思うたびに、
自分を奮い立たせた。

だけどナンパすることはできなかった。

いざ女の子に近づいて、
声をかけようとしても、
目の前で止まってしまう。

そして声をかけられない自分に、
罪悪感を抱くようになる。

女の子に声をかけようとする

↓

足が止まってしまう

↓

罪悪感

↓

家で自分を奮い立たせる

↓

ナンパに行く

↓

地蔵になって立ちっぱなし

以下無限ループだった。

こんな調子が1ヶ月も続いた。

このままじゃ絶対無理だ...

そう思った僕は、

「もう誰かに教わるしかない」
と考えたのだ。

「クッソどうやってナンパ師に出会えばいい？」

そう思った僕はGoogleで、
ナンパのことを検索しまくった。

そこでツイッターで、
胡散臭い人が出てきたのだ。

そこに書かれていたのは、

ある大学生のナンパ師が次々と、
女とエ○チしまくってるという内容だった。

そのツイートには、
次々と女の子をホテルに連れ込んで行ったことが、
書かれていた。

なんだこれ？

「ナンパ師とか言ってるけど俺と同じ大学生??」

最初は正直「これは絶対嘘だな」と拒絶反応を起こした。

「ナンパでそんなにホテルつれこめるわけねえだろ。」
そう思っていたからだ。

でも正直ナンパという世界にはマジで興味があった。
街中で女の子に声をかけれるなんて、
凄すぎると思っていたからだ。

その後、「本当にこいつナンパ師なの??」、
という思いでツイッターを覗いてみた。

そして、その人のツイートを読んで行くうちに、

どうやらこの人は本物なのではないか？

と思うようになった。

この人は女の子を連れ出すまでのトークを、
音声にまとめている。

しかも一人ではなく、何十人という人数をだ。

実際にその音声を聞いても、

「ナンパ師のトークが上手い」ということは、
トーク力皆無の僕でもわかった。

そもそもナンパ師のTwitterを見るなんて、
生まれて初めてのことだった。

だから驚くことも多かった。

まずナンパ師のツイート内容。

ナンパ師は即報と言ってホテルに連れ込んだ時に、
女の子の下着であったり、
ホテルのベッドを写真に撮って、
ツイートする。

その即報が異常に多かったのだ。

最低でも週に1回は即報を流しているし、
番号ゲット、カフェに連れ出している音声を、
大量にツイートしている。

最初は気味が悪かった。

「ヤラセじゃねえの？これ」
とっていた。

そう思う度に僕は、

彼がホテルに連れ出すまでを収録した音声を聞いた。

だけど、実際にナンパの音声を聞いてると、
「これは演技では無理だろ…」というのが、
女の子の反応でわかった。

「これは演技じゃないし、ヤラセじゃない…」

こいつただもんじゃねえ

普通に日常を過ごしていたら絶対に知ることのない情報が、
ツイートされてくることは当時の僕に撮ってこれ以上ない刺激だった。

僕の価値観が毎日崩壊して行くことがだんだん病みつきになっていき、
ツイートが流れてくるのを毎日楽しみにしていた。

ナンパを始めるにはリア充だったり、コミュ力が無茶苦茶ないと、
無理なものだと思っていた。

また超絶イケメンでウェイウェイしているチャラ男じゃないと、
絶対に不可能だとも思っていた。

でもこの人はリア充でもウェイでもないことを、
Twitter内で公言していた。

それを見た僕は、、

「マジで!?!?!?じゃあ俺にもできるんじゃない??」

と希望が湧いてきたのだ。

そしてTwitter内に「合流申請待っています！」

という書き込みがあったので、

「俺もこの人と合流してナンパするしかない」と決心した。

僕はツイッターに「音声の感想」に加えて、
無理を承知で合流したいですとお願いした。

今思えば「女の子に声をかけられない」という超初心者が、
凄腕のナンパ師に合流してもらうなど無礼すぎるオファーだった。

でも僕と彼が同じ大学生あったこと、
彼の「他人にナンパを教えるのが好きな性格」が
功を奏して一緒に合流してナンパをすることになった。

しかしあまりにもスムーズに合流が決まってしまう、
嬉しかったのだが、急に怖くもなった。

だって相手は大学生でえげつなく女の子を抱きまくってる人。

僕の常識には存在しない。

いや本来存在してはいけない人なのだ。

とりあえず何か失礼があつてはまずいと思い、

ブログを検索して片っ端から見ることにした。

ブログなどを見て彼がどういった考えをしているのか、

先にリサーチすることで会話がしやすくなると思ったからだ。

そして何よりも得体の知れない人と会う前に恐怖を打ち消す方法が、

これしか思いつかなかつたのだ。

彼のブログやツイッターを見ていると、

僕にとってそこで語られていた情報は何もかもが新しい世界で、

血眼になるくらい目をギラギラさせながら見た。

僕は確かに受験生時代は勉強しまくっていた。

毎日10時間以上勉強しまくっていた。

そして誰もが知っている私立大学に入学した。

そんな僕は「ある程度世の中のことはわかっている」と自惚れていた。

だが、それは受験という世界を深掘りしただけで、

世の中のこと、恋愛のこと、ナンパのことは何もわかっていなかった。

まさに井の中の蛙だったのだ。

女の子と仲良くなってエ○チしたくて仕方がなかった僕は、
今まで見たことのない魅力的な世界に出会って、
魂を揺さぶられて心臓がバクバクするような感覚を味わった。

「一体どういう人生を送ってきたらこんな人間になるのか??」

そんなことを思いながら、
彼に会う日を待ち望んでいた。

そして当日、
池袋で合流することになった。

いざ実際に会って話して見ると、
ツイッター、ブログよりも内容の濃い話を延々とマシンガントーク。

内容が異次元すぎて僕は頭がパニック状態だった。
常識をぶち壊すパンチを浴びまくってKO寸前だった。

そして僕が地蔵になっていて、
声がかげられないことを彼に話すと、、、

「じゃあ僕のいう通りに声をかけてください」

と伝えられた。

そしてそれがなぜ有効なのかも、
丁寧に解説してくれた。

- ・そもそも地蔵とは何か？
- ・なぜ地蔵が起こるのか？
- ・ナンパ師はなぜ地蔵にならないのか？
- ・どういうマインドで声をかければいいのか？

「なるほど...」
と思わず頷く僕。

「じゃあ行ってみましょうか」ということで、
女の子に声をかけに行くことになった。

「俺にも行けるのかな？」と思いながら、
実際に女の子に近づく僕。

ヤバい緊張するよ...

ターゲットの女の子まで2m...

ターゲットの女の子まで1m...

残り30cm...

よし斜め前に出た...

相手の顔をチラッと見た。

大人しそうな大学生だ。

顔はまあまあかわいい。

やべえ緊張するよ逃げたい

いやでもやるしかない

そんなことを思いながら、
必死に声をかけた。

すいません

僕の心臓の鼓動は最高潮に達していた。

バクバクと音がなっているのが聞こえた。

緊張で口が渇く。

頭がぼーっとする

相手の女の子は大学生くらいの年齢。

一体なんだと驚いた表情をしている。

いけ...いくんだ...言われた通りにやればいいんだ...

そう思った僕は口を開いてこう言った。

すいません。財布落としましたよ??

やべえ俺女の子に話しかけてるよ...と、

少しばかりテンションが上がってしまったが、、、

違います。と、

少し怪訝な顔をしながら、

答える女の子。

その時点でナンパと気づかれたのか、
サササーと早足に女の子は逃亡。

「クッソ逃げられたか...」と、
思わず呟く僕。

確かにナンパは失敗した。
けれども、

ついに地蔵することなく、
女の子に声をかけることに成功したのだ。

「やべえ女の子に声かけてるよ...」と思わず感激。

僕「ヤバイですよ！ついに地蔵脱出しました！普通に声かけれました！」

彼「そんな感じで次も行ってください」

僕「オッケーです！」

そう意気込んで、

次々に声をかけまくる僕。

その日は20人近くに、
声をかけることができた。

もちろん番ゲも連れ出しもできなかった。

でも、

「この前まで地蔵だった俺がナンパしてる...」

ということを見ると衝撃だった。

話終わった後、そして一緒にナンパした後も、

今まで感じたことのない興奮が、

ずっと冷めないまま続いて、

家に帰っても全然眠れないくらいだった。

こんな気分になったのは人生で初めてだった。

こうして僕はその彼が楽しそうに生き生きと、

ナンパについて話すのを間近で体感して、

僕もナンパの世界に足を踏み入れてみたいと強く感じたのだ。

そして僕は彼にあることをお願いしたのだ。

～最終章～

対人恐怖症の僕が
ナンパ師に
弟子入りしたら
人生変わった

「今後長期的に指導をお願いすることは可能ですか？」

僕は彼に今後のナンパの指導をお願いしたのだ。

ナンパ師なんて普通に生きていたら、

出会えるわけがない。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

そう思った僕は、

彼に本気でお願いしてみたのだ。

彼の反応はどうだったかというと、

そんなに悪くはなかったが、

彼自身も人にナンパを指導するのが、

初めてだったようで戸惑っていた様子があった。

だが彼に「ナンパを教えたい欲」は、

どうしてもあるようだったので、
すんなりと了承してくれた。

そうして僕は弟子となったのだ。

そして僕はまず池袋に出て、
ひたすら声掛けを繰り返した。

確かにナンパでやることはシンプルだ。

歩いている女の子に声を掛けるだけ。

あとは自分のトーク次第。

「ナンパなんて俺になんかできるわけない」

そう思っていたけど、
実際にやって見るとそれは本当に勝手な思い込みだった。

それから僕は女の子に声を掛けることが楽しすぎて、
四六時中ナンパのことを考えていた。

地元で買い物をしている時でも、
大学に向かっている時でも、
女の子がいたら声をかけまくった。

暇さえあれば、
師匠のナンパ音声を聴きまくった。

そのおかげか、

ナンパ開始から3日で番ゲできたし、
1ヶ月目で即成功した。

でも割と時間はかかった。

最初の1ヶ月はほぼ毎日、
池袋に行って朝から晩まで声をかけまくった。

朝の11時に行って、
夜の8時まで声をかけていることが、
ザラだった。

そう考えると決して早く結果が出たとは、
言い難い。

一日中ナンパして、
番ゲすらできないということもあった。

「もうナンパを辞めようか」と、
心が折れかけたことも何度もあった。

ただ辞めたところでいつもと同じように、
一人家でオ○ニーするしかないことくらい、
わかっていた。

ここで頑張らなかつたら、
俺は一生モテないままだ。

そう思って自分を奮い立たせていった。

じゃあどうやってナンパを上達させていったかというと、
とにかくお金をつぎ込んだ。

教材やら他の凄腕のナンパ師から技を盗むために、
ご飯をご馳走したりしたりと自己投資しまくった。

こうすればつぎ込んだお金を絶対に回収しなきゃと、
自分にプレッシャーをかけられるからだ。

そして効果は絶大だった。

あれよあれよと結果が出るようになり、

**番ゲ、連れ出し、即を次々と成功させることができるようになり、
その自己投資したお金分の利益は得ることができた。**

その時は本当に興奮したし、
何より自分がやってきたことが報われて嬉しかった。

今では自分がナンパしていることを話すと、
友達が教えて欲しいと言ってくるので、

動画とかを作ったり、一緒に声かけしたり、
基本的なことから教えたりもしている。

また僕は今もストリートで活動している。

ナンパで成功、特に即をするためには、
声かけ、マインド、トーク、雰囲気などなど、
改善することが今の自分にはたくさんある。

なので、今でもたくさん勉強しているが、
その勉強が恐ろしいくらい楽しい。

これをマスターしたら本当に何でもできちゃうなど、
感じているからだ。

中学、高校の頃は、
勉強が楽しいと思ったことなんて、
一度もなかった。

でも今は本当に楽しすぎるのだ。

勉強したら勉強した分だけ、
ナンパが上手くいくのだから。

もちろん、僕は勉強はそれなりにできた。
高校だって進学校だったし、
今通っている大学も知らない人はいない大学だ。

ただ図工や美術は、
恐ろしいくらい出来なかった。

英語や数学は問題が1つあれば、
答えも必ず1つある。

でも図工や美術は違う。
正解なんてものはどこにも存在しない。

よく学校の授業で出される、
自由研究や読書感想文は苦痛で仕方がなかった。

何もアイデアが思い浮かばないから、
何も作ることができないのだ。

僕は答えがある中で、
解答を導き出すのは得意だったけど、

答えがない中で自分なりの答えを出すのは、
超絶に苦手だった。

よく考えれば自分の人生に答えなんかない、

そしてナンパにも答えなんてない。

数年前の自分じゃ今の自分は全く想像できないだろう。

僕は今までナンパで成功している人を、
たくさん見てきた。

どんな人も謙虚で現状に満足せず、
向上心に溢れていた。

そんな彼らを見ていると
「カッけえ…。俺もこうなりてえ」と、
思うような人ばかりだった。

好きな時に女の子をホテルに連れ出して、
エ○ちしまくる。

そしてその人には可愛い彼女がいて、
毎日を楽しそうに生きている。

こんな華々しい生活、

そして女の子に囲まれる未来があるのに、
僕は見て見ぬ振りにはできない。

一体世の中の男子の何割が、
性生活に満足しているだろうか？

少なくとも僕は全く満足していなかった。

僕は出会いがなく女の子と全く絡みがなかったので、
悶々としながら毎日を過ごしていた。

「そんな色んな女の子とエ○チ」できるわけがない。

僕は半ば諦めていた。

だけど僕の師匠は違った。
月に10人以上もの女性を抱きまくって、
日替わり弁当のように色んな彼女と付き合っている。

「本当にこんな奴がいるのか...」
と僕は衝撃だった。

そして
師匠と一緒にナンパしていたら、
ふつふつとある感情が蘇ってきた。

色んな女の子と仲良くなりたい。
色んな女の子と付き合ってみたい。
色んな女の子とエ○チしたい。

そのような感情だ。

男ならば誰もが一度は思い、
そしてほとんどの人が諦める感情。

だが、感情という言葉では生ぬるいかもしれない。

煮えたぎる欲望

切望する魂

と言った方が正しいだろう。

「煮えたぎる欲望」「切望する魂」

この二つが僕をナンパ活動へと、
駆り立てるようになった根源かもしれない。

僕は好きな時に女の子を抱いて、
誰もが羨むような彼女ができる
師匠のようなライフスタイルに本気で憧れている。

もちろん憧れるだけではなく、
「絶対になつてやる」と心に誓った。

今回このレポートでは、
今までの人生を細部までこだわって振り返っていく中で、
自分の嫌いな部分と向き合わなければならなくて、
無茶苦茶辛かった。

ナンパして女の子にガンシカされたり、
罵声を浴びせられることよりも正直こたえた。

「この人しつこいんですけど」と言われて、
警察に突き出されそうになった時よりも、
エネルギーはもってかれたし疲れた。

でも振り返ってみて良かったなと今は断言できる。

自分が今までどう生きてきたかを知ることで、
頭の中がちゃんと整理されて、

たまに今まで自分の知らなかった「新たな自分」が、
浮かび上がってきて、驚くことが多々あった。

なんせ普段過去をしっかりと振り返ることなんてやらないので、
得られるものがすごく大きかった。

だからこそできる限り、
自分の素直な気持ちをぶつけてやろうと思った。

そして僕がリアルな自分の姿をさらけ出すことで、
みなさんに1つでもいいから何かを感じ取ってもらい、
人生をそしてこれからのナンパ生活を導くきっかけとなればと思っています。

このレポートは以上になります。
最後まで読んで頂きありがとうございました。

あともう少しだけお付き合いください笑

ここまで読んできても、
「俺になんかナンパなんてできるわけねえだろwww」と、
思ってる方がたくさんいらっしゃるでしょう。

ですがナンパは意外と世の中が思っているほど、
ハードルの高いものではありません。

少なくとも僕がやっているストリートナンパはそうです。

僕が始めた時はコミュ力もなければ、
センスも全くありませんでした。

コミュ力に関しては大学1年生の時には対人恐怖症でしたからね笑
本当にトークに関しては下手中の下手です。

最初の頃は師匠に、
「トークがゴミすぎwww」と言われたこともありました笑

というかトークって学校でも習わないですし、各自が勝手に身につけていくものです。

なのでセンスの差が露骨に出てしまいますが、僕はマジでセンス皆無でしたw

とにかく何が言いたいかと言いますと、

誰でも簡単にできるということです。

それは僕のレポートを見て頂けるとよくわかると思います。

センスは知識を学んで実践を繰り返すことで鍛えられます。自転車と同じです。

最初は「こんな不安定な乗り物乗れるわけねーだろ～」とか勝手に壁を作ってしまうのですが、実際にやって見るとそうでもなったりします。

確かに最初は苦労するかもしれませんが、1日2日でできるようになるわけではないですよ。

でも今思えばほとんどの人が

「そんなに大したことなかったな」と感じるはずですよ。

そしてしまいには、
立ち漕ぎしたり、手を離しても
バランスよく運転できるようになります。

これもナンパと根本的には変わらないです。

僕は月に10人の女の子をホテルに連れ込む師匠に出会って、
全ての価値観がぶっ壊れました。

もちろん月に10人という人数にも驚きでしたが、

もっと驚いたのはその仕組みがシンプルだったことです。

その師匠から直接学んでみると、
ストリートナンパも天才しかできないような難しいことでは
ありませんでした。

コミュ力が皆無だった僕も、
ナンパを学んでいったことで、
トークも雰囲気も変わっていきました。

たった数ヶ月ですが、
まるで別人のように変化することができたんです。

ナンパができる人とできない人の違いは一体なんなのか？

それは

「ナンパ師の価値観を知っているか、知らないか」

ただそれだけなんです。

あとはその価値観を受け入れることが
できてしまえば、

誰でも簡単にナンパでいろんな女の子と、
エ〇チすることができるようになるわけです。

「じゃあ具体的にナンパ師の価値観ってなんなのよ？」
と考える人がいると思います。

当然気になりますよね。

メルマガでは無料でその秘密について、
もっと濃い情報を公開しています！

いつでも登録解除可能なので、
興味のある方は気軽にこちらのリンクからご登録して見てくださいね。

リンク

それではメルマガで会いましょう。

ニャンチカでした。